

## 薬剤師の臨床センスが要求される薬学的臨床研究

大井 一 弥

**The Pharmaceutical Research that a Clinical Sense is Necessary for a Pharmacist**

Kazuya Ooi

Dept. Pharmacotherapy, Josai University, 1-1 Keyakidai, Sakado City 350-0295, Japan

平成 18 年度から薬学部 6 年制がスタートし、カリキュラムなどの教育環境が一変したことは、薬学教育における歴史的な変革である。それにも増して医療現場における制度改革も目まぐるしいものがあり、医療の質の変化や格差も急速に進んでいる。

薬学部の年限延長は、医療の担い手である薬剤師が医療現場で期待に応える素養を培うことが 1 つの目標である。つまり、旧 4 年制では、知識の向上に対して努力を行ってきたが、演習などを通じて、基礎と臨床の融合性を理解するには不十分な体制であった。

しかし 6 年制では、現場が求める薬剤師育成の教育を行うに十分な環境が整ったと考えられるため、教員は、医療薬学教育に対するモチベーションの高さが必然的に要求される。

近年、医療現場では、専門薬剤師の養成に関する話題が盛んであるが、このことで、薬学教育が意識すべきことは、知識が隔たらないことの重要性や実践力を兼ね備えた内容を盛り込むことである。基礎研究では、一定方向のスキームを持つものが多いが、医療薬学研究では、患者から発せられたものか、若しくは別角度のものかによって基礎的検証を融合させて進めていくのか、又はデータ解析を中心に行うものかによってもあらゆる方向性の展開が予想される。

しかし、医療薬学が専門である場合、基礎研究とは異なる患者が軸となるために、豊富な発想展開が可能な環境下で、形成的に研究を推し進めることができるかが重要な要因である。

つまり、解剖・生理、病態、治療の系統的な知識の上に、施設に順応した実践力が具備されていることが望まれ、知識や論理性だけが、全面的に押し出される考え方では、柔軟な思考が求められる医療現場では、到底使えないスキルといえる。

元来、薬学教育がイコール薬剤師教育でなかったために、医学教育に比して臨床をはるかに遠い位置で捉えて教育を展開してきた歴史的背景がある。よって、医療現場における薬剤師は、職能を発揮するための方法論について、堂々と教え伝えるものが確立していないために、指導薬剤師の数も圧倒的に不足している。このような環境下でも研究を続けてきた薬剤師は、モチベーションを高いレベルで維持しながら、相当の時間を費やして、独学を貫き存在を認められたものである。

このプロセスは、簡単には述べられないが、見本や尺度がないため精神的に追い込まれながらも、薬学的センスを自ら生み出すことによって、ここに到達したと考えられる。

最近では、スペシャリストを求める一方で、ジェネラルリストの養成が必要であるとの意見もある。例えば、がんという疾患で、専門性を追求した場合に必要なことは、抗がん剤の作用機序を学び取ることでもなければ、薬剤の物性を知り尽くすことでもない。つまり、がんが発生してターミナルケアに至るまで、患者に対して地道な探究心を持って、業務や研究を遂行し、臨床腫瘍学を駆使しながら、苦しむ患者を救うことができる、土壇場で引き下がらない薬剤師としての自力を形成することにある。

さらに、患者をみることで、医師と協議し、ときには、他の医療従事者と白熱した議論も行う。そのような状況が作り出せれば、自然ななり立ちでデー

タが集積され、学会発表や論文作成に至るものと考えられる。

皆がその壁を突き破れば、いつまでも薬剤師のみのフィールドで議論を進めていくことは、かならずしも得策ではないことに気付くであろう。

今こそ、薬剤師は、創生した薬学的センスを持ち合わせた科学者同志が手を携えることで、科学的に

価値のある術を生み出して、確固たる次世代の薬学を涵養する時期にきていることを認識すべきである。

今回の誌上シンポジウムでは、臨床現場における問題点を薬学的臨床研究にまで至らせた事例を主に取り上げ、これからの薬剤師のあるべき方向性を示すこととする。